會津八一全集

第十卷

會津八一全集　第十卷
定價一五〇〇圓
昭和四十四年八月十日印刷
昭和四十四年八月二十日發行
著作權者　會津蘭子
發行者　山越豐
印刷者　山元正宜
發行所　中央公論社
東京都中央區京橋二一一
電話（五六一）五九二一
振替東京三四

編輯者例言

一、第十巻は、第一部研究、第二部雑纂、第三部短歌・俳句拾遺の三部に區分した。また末尾に新たに編輯した「年譜」と「書誌」を收錄した。

一、第一部のうち「鬼瓦について」は新收である。第二部は假りに雑纂としたが、じつは、雑纂のうちには隨筆、評論、序跋などの文章をふくんでゐる。第二部に收載した諸篇の多くは新收である。

一、第三部は短歌と俳句の拾遺であるが、紙數の都合で、やむをえず二段組みとした。「短歌拾遺」の昭和二十年と記した歌は、戰後、道人の廢棄したもので生前みづから編輯した「會津八一全歌集」にも採錄しなかつたものである。

一、第二部雑纂の諸篇の書誌的記事は、すべて「後記」にあきらかにした。

目次

編輯者例言

第一部　研究

中宮寺　三

中宮寺について　三

龜について　九

中宮寺本尊の樣式について　一〇

彌勒と如意輪　一四

鬼瓦について　一六

古鏡の話　二六

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

第二部　雜纂

蛙面房俳話　四五
菊二が發句　一五四
水原町瓢會「課題詠艸」の概評　一五六
百鷗が俳句　一五八
新年雜吟附言　一六二
『楓軒俳句帖』序　一六三
我が俳諧　一六五
俳句を募るにつきて　一八六
落日庵試筆頒布　一九五
落日庵消息　一九六
北人私信　二〇八

須知正忠君の靈に告ぐ　二一二
第二回帝展所感（アンケート回答）　二一四
秋草堂消息　二一五
雙柿舍の額　二一九
落合通信　二二六
武藏野だより　二二七
魯山人の作品評　二四二
富本憲吉の藝術觀　二四三
大淵武夫作品頒布會推薦　二四八
蝙蝠山房童眞印會趣意書　二五〇
印　象（龜高五市追憶）　二五二
北川朱泥印會趣意書　二五六
雙柿舍追憶四則　二五八

北川朱泥鑄印會趣意書　二六六
河竹繁俊・柳田泉著『坪内逍遙』書評　二六九
濱田青陵君のこと　二七二
土岐善麿作 新作能「夢殿」（アンケート回答）　二七七
棟方志功のこと　二七八
奥田勝君にしめす　二八三
『逍遙先生墨寶』序　二八六
古美術の破壞　二八八
美術を思ふ心　二九二
「漢字の認識」發表についての覺書　三〇三
婦人の文化生活　三〇五
小泉清君を推薦する　三二八
學　規　三二九

歌をよむには　三三一
歌をよむには　補註　三三三
作歌の心得　三三五
不思議な感（讀賣文學賞受賞の言葉）　三三七
年譜ノート　三三八
書入陶器展趣意書　三三二

第三部　短歌・俳句拾遺

短歌拾遺　三五五
俳句拾遺　三五八
落日庵抄　三九五
歸省雜記　四一〇

第一部　研究

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

中宮寺

中宮寺について

中宮は天皇の后の一人で、ここでいふ中宮は聖德太子の生母穴穗部間人皇后（穴太部間人王）を指す。聖德太子が在世の頃、早く推古天皇の十五年に建てられたやうに考へられる文獻があるが、その文獻の確かさについて、强く信賴すべき材料に乏しい。そこで推古天皇の三十一年頃、聖德太子の崩御の時に建てられたのではないかといふ別の說が起るのである。卽ち、今日中宮寺に曼荼羅といふものがあつて、それが太子の崩御の事實と、そして間人皇后の崩御のことも共に含まるる文獻を持つてゐるから、その曼荼羅を本尊として造られたのではないか、といふやや空想的な考察である。けれども今中宮寺に曼荼羅はあるが、その曼荼羅が始めから中宮寺にあつたと考へることは出來ない。おそらくこの曼荼羅は最初宮中に、ある年月の間保存されてゐたであらう。そしてしかる後に法隆寺にをさめられたらしい。それが後に鎌倉時代にいたつて、はじめて中宮寺に交付されたと考へねばならぬ。それ故に天平時代にはこの曼荼羅は法隆寺にあり、藤原時代にも法隆寺に傳はつてゐたものである。奈良時代の最も大切な文獻たる『法王帝說』の中

には、この曼荼羅が法隆寺にあることが示されてゐる。そして同じく奈良時代の『法隆寺資財帳』の中にも、この曼荼羅らしきものが目錄に載つてゐる。それ故、先に述べた第二の說はあまり知識なき人の空想としなければならぬ。

聖德太子には四人の妻がをられた。その中で最も太子の交情の細やかであつたのは膳(かしはで)の后であつた。その外に蘇我氏出身の一人があり、皇族が二人あつた。その當時の夫婦關係は、決して一つの宮中に多くの婦人が一緒に住んでをられたのでなく、天皇は一人一人の后をそれぞれの家に訪ねられたとしなければならぬ。それ故に太子の如く、多くの離宮を持つてをられた場合、どの宮に誰がをられたと考へて行くのが一つの大切な方法である。

法隆寺の今の建築及びその本尊が作られたことに對しては、膳の后が主として力をつくされたが、橘大郎女は推古天皇の孫にあたられて、おそらく年の一番若い妻であられたと思はれるが、この方は全く法隆寺の建立には關係なく太子の崩御の後、この曼荼羅を作つてそれを御自分の宮の中にかけて、太子を偲んでをられたと考へられる。法隆寺の釋迦の銘文に太子の最期の有樣が書かれてゐる。そしてその銘文の中に間人皇后のことも出てくるが、ただ前年の十二月に崩御されたとあるだけで日がない。しかるに中宮寺曼荼羅の銘文にはその日が明記してある。面白いことには法隆寺の銘文には膳郎女と、太子の亡くなられた事實を書いてあるだけで、橘大郎女のことは一言も記してゐない。その反對に曼荼羅の銘文にはひとり橘大郎女のことを記すだけで、膳

郎女のことは少しも書いてない。その間に二人の女の感情を窺ふことが出來る。

曼荼羅の銘文は『群書類從』にもあるが、少し正確でない。『觀古雜帖』にのせてあるのが正しい。古くは『法王帝說』の中に載つてゐる。この銘文の中に

それ故にこの曼荼羅を天壽國曼荼羅と云つてゐる。しかるに天壽國とは何であるかといふことは、學界では久しく疑はれてゐる。飛鳥時代には最も強く支那六朝時代の影響をうけてゐるが、六朝時代から唐時代へかけて「無」といふ字を「无」と書く。それであるから天壽國は卽ち无壽國であらうといふ說が起つて來た。卽ち无量壽國――西方極樂――の「量」を落したのであらうと考へる學者がある。しかし私は天壽國だと信じてゐる。

无量壽國―（阿彌陀佛）　前田慧雲　大村西崖　小杉榲邨

天壽國―（彌勒佛）　松本文三郎　辻善之助　會津八一

今、中宮寺は法隆寺東院（太子の斑鳩宮跡）の裏にあるから、太子の母を祀るための寺として

はふさはしい位置ではあるが、創立の時はもつと遙かに東の方にあつた。そこを殆ど訪ふ人がないのは惜しいことである。富郷村の幸前の畑の中にあつて、池があり、松の木が一本生えてゐるが、その附近の田地についてゐる小字名前を調べると、寺の跡であつたことが分る。そしてその土の高さからも、僅かに元の寺を朧ろげに想像することが出來る。そこに大きな礎石があつて、明治時代まで殘つてゐたのに、近村の富豪が自分の庭に運び去つた。その石は恐らく中宮寺の塔のものであつたらしい。私はその石の上で遊んだことのある老人に會つて話を聞いた。その池の底からたまたま瓦の古いものが發見されるが、正式な發掘が未だ行はれてゐない。が、稀に出た瓦によつて、この寺もやはり飛鳥時代における存在を肯定することが出來る。奈良から法隆寺に行くバスの中に、右を望むとその場所を見ることが出來る。今の位置に移つたのはずつと後世のことであつて、鎌倉時代に於てこの寺が非常に榮えた時は、やはり幸前の池のある所であつた。

人間の書いた銘文が、人間によつて刺繡されて二重に人の手にかかつたものであるから、誤りがあれば發見されるプロバビリチイはあるが、それでもその二重の手順をくぐつて、誤りが正されずにをることはあり得ないことではない。それ故に天壽國は无量壽國の誤脱だといふ說を不合理とはいひかねる。けれども伊豫の湯岡碑には「壽國」といふ言葉がある。そしてこの石碑も太子が浴泉の記念のために建てられたもので、今はないけれども、『釋日本紀』『伊豫風土記』等に

その全文が出てゐる。のみならず又この壽國といふ言葉はその後も折々散見することがあるが、興福寺の觀禪院の銘文にも「壽域」といふ言葉がある。そして嚴密にいふとそれらのすべての言葉が、必ず同じパラダイスを意味してゐるといひかねることがあるが、中宮寺と湯岡の場合には同じ推古天皇の御代であるし、連絡をとつて考へたいものである。

天國の思想は東西南北におのおのそれがあり、天上にもあつたと想定されたのであるが、印度又は支那に於てもそのあらゆる方向のパラダイスが、始めから同じやうに尊ばれたのではない。そして今この中宮寺の場合に於ては天上のパラダイスであるか、西方のパラダイスであるかが考へられるのである。そして支那に於ては歴史的に天上のパラダイス、卽ち彌勒菩薩のをさめる淨土が、阿彌陀如來のをさめる淨土、卽ち極樂よりも早く一般の信仰を博した。それだから支那に於けるこの關係を知つてゐるものは、推古天皇の時代に於てはやはり彌勒の淨土が信ぜられたのではないか、と信じたくなるのである。しかし阿彌陀の存在を聖德太子が知らなかつたと云ふことは出來ないから、斷じてこれが極樂でないと云ひ張ることは出來ない。

その最も有力な證據の一つは夢殿の觀音の存在である。觀音の信仰といふことは、推古天皇の御代に於ても相當行はれてゐたことは、今日に殘る多くの觀音像を以て知ることが出來る。そして觀音の信仰といふことは多分に阿彌陀の信仰と關係がある。そして多くの場合に觀音の冠の上には小さい阿彌陀像がついてゐる。かくの如きものを信仰してゐたことは阿彌陀の淨土を認めて

ゐた一つの證據であるし、又太子自らが書かれたといふ『三經義疏』の中に阿彌陀の淨土は存在してゐる。それだからはつきりと西方淨土を否定することは出來ない。ただ後世には專ら西方淨土の信仰が盛んになつて、彌勒淨土の信仰が殆ど忘れられてしまつたのに反して、飛鳥時代から所謂白鳳時代へかけて、彌勒淨土の信仰が割合に盛んであつたことが目につくのは事實である。そこで學者は彌勒淨土說に傾くのである。

けれどもこれは、西方淨土を否定してこれに決定しなければならぬ程のことではない。それ故にいづれが妥當であるかといふ位のことに落着くより外はない。が、彌勒菩薩に關するお經をみるに、かの淨土に於ては人間の命が非常に長いことが述べられてゐる。しかし阿彌陀の淨土に於ては更に長いのであるが、もしはじめての日本人が人生五十年といふ常識にくらべて、人間が數萬年も生きるといふことを聞かされたならば、取敢へずそこを壽國または天壽國と名付けたと考へても無理はなからう。今日の我々は無量壽といふ抽象的な永遠の壽命を示す淨土を知つてゐるから、我々の頭には彌勒の方はくらべものにならぬ程短いが、推古天皇の時代の一般の人々の頭には、この彌勒の天上の淨土が、まづ壽國としてあこがれの的となつたと考へられぬことはなからう。しかるに二三年前に出陳された佛像に、明瞭に天壽國と刻まれた石佛があつたといふことであるから、天を无の誤りとしなくてもよいと思ふ。

それ故に平安朝以後にほとんど見えなくなる彌勒の名が、『日本書紀』の始めの部分にしばし

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com